慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産的及び不生産的なる語に就て（五）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.11 (1924. 11) ,p.1605(67)- 1622(84)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241101-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。

若しも人が人口增加を目して純然たる生物學的增殖行程であると考ふるならば全然誤りである。此行程は總ゆる可能なる社會的狀態に依つて左右せられる。即ち階級別に、此等諸階級の地位に、從つて又社會的經濟の形式に依つて左右せられる　然るに社會の形式、其の構造は生產力の發達程度如何に倚據して居る。茲に於て何人も察知し得る如く技術の發達と人口の變動即ち其の數の變化との關係は全く左程に簡單ではない。只粗雜に考ふるものゝみが其れが人間の增加とは動物の增加に於けると同樣に原始的な簡單な關係にある事を信じ得るのみである。例へば一社會に於て人口が增加するためには生產力が增加しなければならない。然らざれば餘剩の人口は生存し能はざるに至るからである。併し乍ら他方物質的富の增加は其の結果として常に、又總ゆる階級に對して、必ずしも人口の增殖を招徠するものではない。例へば無產階級の家族が困難なる生活條件の爲めに人工的に產兒の數を制限するが如き、上流社會の婦人が容姿の衰ふるを恐れて其の母權を放擲するが如き又佛蘭西の農民が相傳の資產を分散せざらんが爲めに二人以上の子女を持つ事を欲せざるが如き、之れ我々の眼前する所である。斯の如くして人口の變動は社會の形式と個々の階級及び團體の狀態とに遵ひ、社會的條件の全系列に依つて左右せられる。

要之、社會に關して我々は次の如く言ふ事が出來る。疑ひもなく人口の增殖は生產力の發達を豫想する。更に特殊の時代、特殊の社會形式諸階級の特殊の地位は人口變動の特殊の法則を喚起する。「抽象的（一般的の、或一定の社會形式に倚據せざる……Bucharin）人口法則は人類が、歷史的に干涉せざる僅の動植物にのみ存する。……總ての特殊的歷史的生產方法はそれの特殊なる歷史的に妥當なる人口法則を持つて居る。」（Marx: Das Kapital. I. Hamburg. S. 596）然るに歷史的生產方法即ち社會の形式は生產力の發達即ち技術の發達に依つて決定せられる。從つて人口變動の法則が決定的のものなのではなくて、生產力の發達と此發達（若くは衰頽）の程度如何が人口の發達を決定するものであるといふ事になる。（Bucharin: SS. 135-137）

以上は Marx の唯物史觀に於ける生產力を中心として社會と自然との平衡關係を論じたる Bucharin の所說の大要である。猶ほ彼は此章の最後に於て、前記二異論の辯駁に續いて第三の異論として社會的發達の原因を人種的不平等に歸せしめんとする說を擧げ、其の誤謬を指摘して居るけれども、叙上の問題に關する限りに於て此反駁は左程重要でないと考へるので筆者は之を省略し樣うと思ふ。（終）

生產的及び不生產的なる語に就て（五）

榎本鑛治

三十三

前號末尾に記述し置けるが如く、ジェヴンスは其の主著「經濟學純理」に於て所謂生產的勞働說及び生產的消費說に全然言及しなかつたのである。然るに彼の死後フォックスウェル敎授（H. S. Foxwell）及びジェヴンス夫人の手に依て整理せられ、之にヘンリー・ヒッグス氏の序文を附して一九〇五年に公刊せられたる遺稿「經濟學原理」中には、如上の二說が相當に論述せられ

てある。即ち其の第五章消費論中に生產的消費說が、又第十八章に生產的勞働說が夫々取扱はれて居る。次に其の概要を記さう。

ジェヴンスは曰く、所謂消費と財の製造に於ける原料の再生產的消費とは之を區別しなければならぬと。通常吾々は、(イ)多量の銀は寫眞師に消費せられ、(ロ)硫黃は炭酸曹達を製造する場合に化學的製造業者に消費せられ、(ハ)桃花心木は指物師に消費せらるると云はなければならぬ。乍併斯る消費の場合には明かに效用の損失は毫もなく、却て其の利得があるのである。去れば桃花心木は机、椅子等の製作に用ひらるゝものではあるけれども、桃花心木の丸太は、挽割られて何等か斯の如き用途に充當せらるゝのでなければ、無用の長物である。此の場合には事實上全然消費がないのである。從て若しも吾々が今後も尙ほ消費なる語を用ひやうとするならば、其の意義の中に效用の損失を包含せしめなければならぬ。併し或る原料が技術に使用せらるゝ場合には、不熟練若くは不運の缺如に依て效用の利得がある。恐らく吾々は、斯の如き消費をば、完成品と原料及び勞働との眞實なる交換と看做すであらう。各種の原料は、夫々機械、大釜、若くは火爐の中に投入せられて、有用なる成果が產出せらるゝのである。併し此の主題に就ては更に生產の項目に立戻る可きである。

次に所謂リカードー・ミル學派の著作に於て吾々は、幾多の生產的及び不生產的消費說を見出すのである。即ち生產的消費とは生產的用途に雇傭せらるゝ勞働者の消費を意味し、不生產的消費とは然か雇傭せられざる人の消費を意味するのである。此の故に人々が斯る用途に雇傭せらるゝや否やは、其の國富に取て顯著なる相違を齎らすものである。併し是れは生產の問題にして、消費の問題ではない。勿論人は生きなければならぬが故に、少なくとも彼等は通常生活必要品を消費しなければならぬ。奢侈品の消費に就ては、何れの場合に於ても不生產的であると云はれる。何となれば人々は斯る奢侈品なくとも充分に――より善くの意味ではない――生產を繼續し得るからである。然らば此の觀念は、即ち生產を繼續誘導せしむるに足る程勞働者に對して食料及び他の生活維持が供與せられたる場合にのみ、其の消費は完全に生產的であると云ふのである。

斯く說き來れるジェヴンスは、生產的及び不生產的消費なる區別には觀念を全然混同せる所があるとなし、其の詳細は後段に讓ると記したるも、彼の與へし內容目次中には遂に見當らぬのである。或は題目の缺如せる第六十九章乃至第七十一章の一が此の考察に與へられたるやも知れずと推測せらるゝ丈けである。

元來總ての消費は單なる消費にして、原料消費の曖昧なる場合を除けば、消費は先づ以て生產的と呼ばれ得ない。人は餓死するまゝになされざる限り、或は乞食として、又は貧民として、若くは立派に雇傭せらるゝ工匠として消費を持續しなければならぬ。若しも彼が熱心に又甚だ生產的に勞働するとせば、夫れは彼がより多く消費す可きがためである。生產の唯一の目的は消費である。換言すれば利用する(utilisation)である。此の點に於ては必要品と奢侈品との間に何等重要なる相違はない。現に大工場の支配人は豪奢なる邸宅を構へて居る。若し彼が斯る生活をなし得る程充分に支拂はれなかつたとすれば、夫れは彼に有利なる管理をなすやうに努力せしむ可き報酬がなかつたのであらうと考へさせる。若しも彼が有能なりとすれば、彼の俸

給は恐らく莫大てあらうけれども、最も生産的なる支出の部分と考へられやう。其の故は、若し彼の管理がなければ他の總ての勞働者の勞働が浪費せらるゝであらうから。（W. S. Jevons, Principles of Economics, edited by Henry Higgs, 1905, ch. V. pp. 33-35）

次に第十八章勞働の能率には生産的及び不生産的勞働なる副題が設けられて、專ら副題の論述に當てられて居る。今其の大意を左に掲げやう。

ジェヴンスは曰く「かの富の意義をば集積し得可き物質的對象に限定したる事實よりして、所謂生産的若くは不生産的勞働なる區別が生じたのである」と。即ち生産的勞働とは集積し得可き富を生産する勞働を指し、不生産的勞働とは之を生産せざる勞働を稱するのである。今アダム・スミス以降ミル及びフォーセット教授に至る一帶の英國經濟學者に依れば、僕婢、自由職業者、俳優、音樂家等の勞働は、悉皆不生産的である。其の理由は、夫等の勞働の跡に、明白に人間の手に觸れ得可き成果を一も殘さゞるが故である。思ふに此の觀念は、アダム・スミスが嘗て「何人も多數の製造業者を雇傭すれば富裕となり、之に反して多數の僕婢を雇傭すれば貧困となる」と云へる點より暗示せられしものであらう。（Adam Smith, Wealth of Nations, edited by E. Cannan, 1904, vol. I, Bk. II, Ch. iii, pp. 313）去ればこそジョン・スチュアート・ミルは「如何に大規模に若くは有利に實行せられたりとするも、物質的富の創造に終らざる勞働は社會及び一般世界をば物質的生産物を以て富裕ならしむるものではなく、却て然か雇傭せらるゝ勞働者の消費量丈け貧困ならしむるものである」と主張したのである。（J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917, Bk. I, ch. iii, § 4, p. 49.）勿論斯の如き主張が正しく容易に覆さるゝ事實は、直ちに證明せられ得やう。例へば或る人が若しも多數の製造業者の生産物を消費すとせば、彼は彼等製造業者を雇傭しても富となるものではない。又若し彼が植木屋を雇傭して各種の美花を栽培せしめ、或は花火製造人を雇傭して彼の會社のために花火の廣告をなさしめ、更に馬車製造人、室内裝飾人、其の他費用多き美的生活に貢献する人々一切を雇傭するとしても、彼は必ずや其の富に附加せらるゝ何物をも見ないに相違ない。ミルの言説に就て云へば、是等の勞働者に依て消費せらるゝ食料は、恰かも彼等が馭者、馬丁、其の他の僕婢たる場合に於けると同樣に有效に消費せらるゝことは明白である。然らば此の全問題は、明かに消費論の一にして、生産論の中に加へらるゝものではない。元來經濟學者の所謂非物質的生産物の特性は、其の生産物が即時に消費せらるゝものであると云ふことにある。今若し馬丁が其の勤勞を提供する間無用なりとすれば、馬丁は全然無用である。又若し聲樂家の獨唱が其の聽衆の耳に毫も心地よく響かずとすれば、其の吟唱は無用である。併し斯の如き場合は、シスモンヂーの考ふる如く、消費が急速に生産に隨伴する場合である。（Simonde de Sismondi, Noueaux Principes d'Économie Politique, 1819, vol. ii. p. 203, quoted by Say, i. 124.）勿論物質的生産物の場合にしても、消費が極めて急速に隨伴することが往々ある。例へば菓子屋の菓子の如き、服屋の既製品の如き、花屋の花束の如き、夜祭の花火の如き類である。

併し生産的及び不生産的勞働の區別は、餘りに不合理なる人爲的性質を帶ぶるものなるが故

に、此の區別に對しては常に幾多の反對が存在して居るのである。即ちローダーデール伯は曰く「スミスの見解に依れば主婦の調製して直ちに其の家族に消費せらるゝ饅頭は不生産的勞働者に依て調製せらるゝものであるが、若しも菓子屋が之を調製して其の主婦に賣却するならば是れは生産的勞働の場合である」と。(Earl of Lauderdale, An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, 1804, p. 150) 然るに佛國經濟學者は、スミスの生産的勞働說を全然是認せざるものである。例へば國富論の一佛譯者たるヂュルマン・ガルニエー(Germain Garnier)の如きは曰く「樂器を富と名付け、樂器の製作の勞働を生産的と看做すと同時に、又其の樂器より生ずる、而も其製作せられたる唯一の目的である所の音樂を不生産と見下ぐるは、如何にも奇なる又矛盾せるものである」と。(Germain Garnier, Tralanstion of Wealth of Nations, 1802, vol. V. 173, note xx., quoted by Malthus, Principles, 1802 p. 46.) 更にヂュルマン・ガルニエーと同性なるジョセフ・ガルニエー(Joseph Garnier)も亦、同樣に公平なる見解を支持するものにして、即ち彼の主張に依れば「總ての合理的勞働は生産的なり」と。(Joseph Garnier, Traité de l'Économie Politique, 5th ed., 1863. p. 25) 然るにも拘はらず學派の精神、詳言すれば其の理論が事實と一致し難き場合すら、明白なる一致を齎らす所の必然性は、其の學派に屬する幾多の權威ある學者をして斯の如き逆說を固執せしむるに至つたのである。(是等の點に就ては既出の拙稿を參照して頂きたい。)

而してジェヴンスの見解を以てすれば、アダム・スミスの與へし意義に於ける生産的及び不生産的勞働の區別は全然擁護し難きものなるは云ふを待たない。即ち總ての勞働は、效用——有用若くは快適なる效果——快樂の餘剩(utility—useful or agreeable effect—an hedonic balance)の生産に差向けらるゝのである。從て物質的財が悉皆使用せらるゝや否やは、假令偶發的問題ならずとするも、全然第二次的の問題である。例へば醫師なる職業の最終目的は、佳良なる健康の生産にある。從て若しも醫師が食事、運動、及び生活樣式に關する注意のみに依て此の目的を遂げ得るとすれば、之に優ることはない。又若しも醫師が醫藥を處方しなければならぬとすれば、藥劑師は、健康の維持若くは恢復に取て主要なる職業に非ずして、寢ろ補助的職業である。然るに舊時の學說に依れば醫師は不生産的にして、藥劑師は生産的である。次に劇場企業の場合には支配人、俳優、舞妓、道具方、背景畫家、大工、衣裳方を始め一劇場に屬する總ての職員は悉皆同一の目的、即ち觀客に對する愉快を生産する目的に從事するのである。去れば彼等は、何れも等しく生産的である。此の故に俳優と舞妓とは不生産的なるも、彼等の衣裳、小道具其の他演劇用の道具を製作する人々は生産的であると云ふは誤りである。更に採炭工業の目的は、石炭を火床へ齎らすにある。即ち炭坑夫及び鐵道從業員は、都會の消費者に取て、其の石炭を火床に齎らす從僕を以て終了する一鏈の作業に於ける早期の參加者に過ぎない。而して從僕は明かに有用なる作業を完成するが故に、有用なる生産者である。

此の場合に於ける見解は、何等是れ以上議論す可き餘地を認めずと考へらるゝ程に明白であらう。乍併ジェヴンスの指摘する所に依れば、事實に於て從來故なく不生産と認められたる勞働者は、全勞働者階級の大部分を構成するのである。而も不生産的勞働者の中には、殆んど總

ての家內從者が包含せられて、其の數は數百萬人にも上るのである。更に陸海軍人、警察官、一般官吏、僧侶、法律家、一般醫師、加ふるに音樂家、俳優、及び其の他公衆に取て有用なる多數の勤勞者も亦、同一なる不生產的階級の中へ數へ込まれなければならぬ。かのアダム・スミスが事實上是認せる所を以てすれば、社會に於て最も尊敬す可き階級の或る者、即ち上は元首より下は司法及び軍務の長官に至る迄の人々は、不生產的と考へらる可きである。併し是等總ての階級の人々が有形物品の生產者と同じく吾々に取て重要であり、又有用である點は、今更指摘するを要しないであらう。物質的富は、若しも之を吾々の慾望に役立たしむ可き勞働と比較して法外なる範圍に亘る程に集積せらるとすれば、最早富たり得ないであらう。例へば從者及び主人の不在のために荒廢するに至れる邸宅及び地所よりも無用なる、否寢ろ有害なるものは他にあらうか。勿論何人と雖も經濟を行はなければならぬ。乍併此の經濟も、賢明なる人が行ふ場合には永續的物品と一時的勤勞とに對する支出の精巧なる平衡（a nice balance of expenditure on durable articles and on temporary services）を保持することに存するのである。例へば臺所は料理人の數に比例しなければならぬし、庭園及び土地は其の所有者の雇傭し得可き植木屋の數に比例しなければならぬ類である。

若しも或る勞働が不生產的と呼ばる可きであるとすれば、不熟練若くは無分別の爲めに其の目指す目的に失敗する人々の勞働は、思ふに不生產的であらう。例へば石炭の絕無なる炭坑を掘下ぐること、失敗に終る隧道を開鑿すること、沈沒す可き船舶を建造すること、運輸なき地點へ鐵道を敷設すること、一人の購買者もなかる可き書物を執筆すること、一人の觀客もなき芝居を開演すること等――斯の如きは、正しく不生產的勞働の場合である。併し讀者の記憶せざる可らざることは、斯の如き實例が上來縷述せる不生產的勞働に何等の關係もなきこと、是れである。從て若し夫等の實例が考慮せらる可き必要ある限り、夫等は各々生產費、保險、及び賃子の主題の下に論述せらる可きである。（op. cit. pp. 85-88）

斯く論じてジェヴンスは、其の生產的及び不生產的勞働說に關する叙述を結んで居る。而して其の末尾には讀者のために斯說に對する贊否の著書が擧げてある。最後に注意す可き點は、若しジェヴンスが早逝せざりしならば、遺稿の第六十四章「不生產的勞働」に再論の機會があつたであらうと云ふこと、是れである。併し何れにしてもジェヴンスの見解を以てすれば、生產的消費說及び生產的勞働說なるものは、共に支持す可らざるものである。唯だ私は、今彼の見解なりとして抄出せる遺稿に就て斯う考へる。即ちジェヴンスの遺稿は、目次のみ與へられて、其の內容が全然記されて居らぬ所の多きものである。試みに其の記述の殘れる部分を數ふれば全篇七十二章中僅かに二十章に過ぎない。而も其の記述すら、如上に抄出せる所に依ても知らるゝ如く、完結したるものとは認め難いのである。故に若しジェヴンス自ら本書を公刊したとすれば、其の內容にも相當の相違を來したであらうと。斯く考ふれば或は右の遺稿の紹介は、彼の本意に悖る所があるかも知れない。併しヘンリイ・ヒッグス氏の言ふ如く、ジェヴンスの著述が斬新であり、暗示的であり、又彼の見地が新奇である點丈けは、充分親ふことが出來ると思ふ。少なくとも彼が舊來の正統派經濟學者と

異なりて、所謂生產的勞働說及び生產的消費說をば否認するの態度に出でたる點は、會得されるであらう。

二十四

最後に私は、英國歷史派經濟學者として名高きクリッフ・レスリー（Thomas Edward Cliffe Leslie）の生產的支出及び消費に關する見解を窺ふて、次に本題の結論に移ることゝする。

レスリーに依れば不生產的支出及び消費は、必ずしも富の數量を減少せしむるものではない。是等は總ての生產に對する終極の誘因（the ultimate incentives）である。而して嘗てシニオアーの考へたる如く、巨額の支出の慣習なくとも一國が貧困に陷ることはあるであらう。加ふるに富の數量に及ぼす支出の影響は、支出の差向けらるゝ方向、例へば勤勞及び消滅す可き財若くは之と反對に永續的物品の何れに赴くかに依存するものである。茲に於て再びアダム・スミスは、理論經濟學が其の後中絕せる研究の方向に進路を開いたのである。即ちスミスの考へたる所に依れば、一人の財產家は彼の收入を支出して、多數の僕婢及び犬馬を維持することも出來るし、美服を新調することも出來るし、又寶石及び玩具を購入することも出來るし、更に有用なる裝飾的建物、家具、書籍、彫像及び繪畫を購入することも出來る。「今同等の財產家が二人あつて、甲が專ら或る方面へ、又乙が專ら他の方面へ其の收入を支出したとせば、其年度末に於て甲の財產は乙のより多額に上ることもあらう。即ち甲は或る種類の財を保藏したからであらう。斯の如く或る樣式の費用は、個人の富に取て他の樣式の費用よりも有利であるが其の樣式は一國民の富に取ても有利である。去れば富者の家屋、器具、及び衣服も、何時かは下層階級及び中產階級の人々に取ては有用のものとなるのである」。（Adam Smith, Wealth of Nations, edited by Cannan, vol. I, bk. II, ch. III, pp. 328-329.）

元來理論經濟學に於ける消費と支出とは、人を迷はす術語となつて居る。兩語共に事物を用ひ盡し、又之を破壞するの意を表示するに至つたものではあるが、支出の適切なる意義は單に其の物品の購買（the purchase of the article in question）を表示するに留まり、又消費の適切なる意義は單に其の物品の使用（its use）を表示するに過ぎないのである。若しも購買せらるゝ事物が永續的種類のものであるとすれば、所謂不生產的消費も事實上集積の一形態となるかも知れない。洵に夫れは最近迄に於ける主要形態の一であつたのである。今實例を以てすれば第十五世紀以降久しき間主人が妻及び家族に對して提供する主要樣式の一は、皿、器具、家財、及び衣服を購買することであつた。單に斯の如き目的に充當せられたとしても、或る樣式の支出は事實上生產的であり得やう。恰かも幾多の美術骨董品と同じく、時代の進展及び四圍の富の增大に伴ふて價値の增加する物品購買の場合即ち是れである。從て個人の穴藏に保存せられたる一瓶の葡萄酒は、其の所有者の死去と同時に彼の家族のためには好箇の投資であつたと云ふことを證明することが出來やう。兎に角富の欲求と支出及び消費との影響に關する主要問題は、即ち如何なる種類の富に、如何なる樣式の獲得に、且又如何なる現實的使用に、夫等は異なれる社會狀態、異なれる社會組織及び他の四圍の境遇に於て導かるゝやと云ふこと是れである。又前述の點に於て富の欲求と支出及び費用とは、社會進化の如何なる法則に支配せらるゝ

か。是等の點に就ては吾々は、理論經濟學より何も敎へられないのである云々。（Cliffe Leslie, Essays in Political and Moral Philosophy, 1879, pp. 223-224.）

即ちクリッフ・レスリーは、應用經濟學に於て消費及び支出の影響を取扱ふものと論じ、側ら所謂生産的及び不生産的消費並に支出なる術語を採用して居るのである。併し彼が同樣に生産的勞働說を是認せりや否やは、今之を詳かにすることが出來ない。

二十五

以上に於て私は、アダム・スミス以降彼の學說を奉ずる經濟學者、及び側ら佛國經濟學者の生産的勞働說並に生産的消費（支出）說に關する見解の大要を紹介した積りである。茲に於て、吾々は是等の學說に對する現代經濟學者の見解を知る必要を感ずるのである。是れ、即ち今日經濟學上生産的及び不生産的なる術語が依然として使用せらるゝや否やを知る方便なるを以てゝある。

先づ生産的勞働及び不生産的勞働に對する批評より聞かう。既に紹介したるが如くセイ、マッカロック等は、極力アダム・スミスの生産的及び不生産的勞働なる區別を排斥したのである。乍併セイにせよ、マッカロックにせよ、彼等は即ち物質的及び非物質的生産物が富と考へられ得るは夫等の效用——勿論スミスは非物質的生産物に對しても效用を是認せるものである——のためには非ずして、夫等の交換價値のためなりとの眞理を充分强調しなかつたのである。換言すれば彼等は、フォジオクラットが深甚なる注意の下に主張したる財（biens）と富（richesses）との區別を輕視し勝ちであつた。爾て此の點より其の後幾何もなく、生産的及び不生産的勞働說が再び唱道せらるゝに至つたのである。故にジョン・スチュアート・ミルが次の如く觀察したるは、正當なりとなさるゝのである。即ちミルに從へば效用の生産なる表現は、通常吾々が生産的勞働に就て構成せる概念を滿足せしむるものに非ず、且又生産的勞働の目的は效用に非ずして、富なりと云ふにある。而して「不生産的」なる語は、生産が人間生存上唯一の目的と看做さるゝ場合を除けば、何等非難の意味を含むものではない。斯く考へたるミルは、スミスの生産的及び不生産的勞働の定義を復活し、又其の意義を擴張するに至つたのである。

既述の如くミルは、通常富の意義をば物質的對象に固著せられたる效用の所有に限定せられるとしたが、其の理由は斯る物件が物質的なるを以てゝはなくして、實は集積し得るが故である。故に（イ）物質的對象に固著體化せられたる效用を生産する勞働を指して、ミルは生産的と稱し、而も此定義を中に商業を包含せしめたのである。次に（ロ）例へば敎師や醫師の勞働の如く人間に固著體化せられたる效用を生産する勞働は、終極的成果が物質的生産物なる場合には、間接に生産的であると呼ぶのである。然るにミルは前著「經濟學上未定の諸問題」に於ては（ロ）の勞働を全然別個の理由に基づきて生産的と看做したのである。即ち人間に體化せられたる效用は、永續的なるが故に、其の生産物は富と考へられ得るからである。（本誌七月號拙稿九八頁參照）最後に（ハ）何物にも固著若くは體化せられずして、一の働きたるに留まる勞働は、ミルの不生産的と名付けたる所である。（本誌八月號拙稿參照）然らば斯るミルの見解に對して難點なきやと云ふに、是れは無論否と答へざるを得ない。

第一に物質的生產物及び非物質的生產物の間に境界線を設くることは、殆んど不可能事である。例へば彫像や繪畫は、物質的生產物に相違ないが、其の價値は、主として俳優の演伎に存する價値と同樣に非物質的である。

第二に殆んど總ての職業は、如何に價値なきものなりとするも、心意的若くは肉體的健全に貢献すると想像せられ得るが故に、間接的には生產的勞働者の生產效力（productivity）增加にも貢献すると想像せられ得る。

第三に不生產的勞働は世界全體に取て生產的でないけれども、一個人若くは一國民に取て往々生產的であると、ミルは認めて居る。例へば傭兵や旅役者の利得が彼の努力に對して支拂はれるとすれば、彼自身の見地より觀れば彼は生產的に勞働する譯であり、又彼が其の利得を自國へ齎らすならば、彼の利得は彼自身の國富の總額を增加せしむる道理である。

第四に物質的對象に體化せられたる效用は、常に必ずしも富ではない。例へば其の需要量以上に生產せられしために賣却し得ざる或る商品は、富に非ざるが故に、其の超過數量を生產するに費消せられたる勞働は、ミルが前著「經濟學上未定の諸問題」中に是認したるが如く、不生產的である。

斯の如くミルの「經濟學原理」中の定義は、不生產的なる場合を二三包含して、其の反對に生產的なる場合を悉皆包含せざるものである。勿論ミルの持論としては經濟學上の定義は通俗の概念と一致するを得策とするのである。乍併科學的定義は、通俗の概念を表現するものに非ずして、其の概念の哲學的基礎を表現す可きものである。加ふるに富の概念、從て生產的勞働の概念も、其の與へる人に依て甚だしく相違ある

が故に、通俗の用法を以てしては能く其の何れの是認をも得難き憾みがある。次に「經濟學上未定の諸問題」に於て、ミルは生產的勞働を定義して、交換價値を有する效用若くは享樂の永續的源泉の直接的若くは間接的創造となして居る。併し永續性が富の觀念に必要であるとの假定は、所謂連續律（law of continuity）に反するものである。而も「事物の永續性には程度の相違があつて、例へば土地の如く永久に繼續するものより、其の使用と同時に消滅する勞働迄もある」のである。（H. D. Macleod, Elements of Economics, 1881-1886, vol. I, p. 85.）然るにミルは、永續性に對して如何なる期間を附するやを言明しないのである。而して總ての生產的勞働に共通なる特長の一は、其の生產物の交換し得ること（exchangeability）である。此の點に於ては非物質的生產物も亦物質的生產物と同樣に交換し得るのである。ロッシャーは生產的勞働を分類して「適當に需要せられ又適當に支拂はるゝ所の總ての勞働」としたが、是れは往古の學者に依て提唱せられ、且フォジオクラット及びアダム・スミスに依て是認せられたる概念、即ち富の原理は交換し得ることに存すと云ふ事に一致するのである。（W. Roscher, Grundlagen der Nationalökonomie, 1922, 26 Auflage, buch, I, Kap. 2. §. 52. s. 150.）併しエフ・エイ・ウォーカーの所說に依れば、總ての富は交換せらるゝものではないが、又原則として總てが交換せられないのでもない。（F. A. Walker, The Wages Question, 1891, pt. I. ch. I.）

ミルの分類の缺點は如何なるものにもあれ、生產的勞働の科學的定義は、必ずしも作業の或る特定部分が生產的なりや將又不生產的なりやを決定するに役立つものではないと、ミルは認

めるのである。況んや生産的階級と不生産的階級とを區別するに於てをや。既にシニオアーも云へる如く、多くの人は生産的及び不生産的階級の双方に屬するものである。更に直接的及び間接的生産效力の區別は、一定種類の勞働に關して支持せられ得るに過ぎない。例へば或る司法官は、或る靴屋の支拂を保證することに依て靴の製造に間接に貢献するものであるが、其靴屋は、其司法官に靴を供給することに依て正義の維持に間接に貢献するの類である。去れば生産的勞働と不生産的勞働とは、其性質に於て相違するには非ずして、其の程度に於て相違するのである。今社會全體より考ふれば、例へば軍人、僧侶、若くは自由職業者の階級が農業者の階級及び製造業者の階級との比例以上に增加する場合の如く、より必要なる人々の利益を冒して迄も維持せらるる勞働は、何れも不生産的である。勿論軍人、僧侶、自由職業者の職業が不生産的であると云ふのではない。斯る職業に從事する人が過多の數に上れば、其の過多の人々丈けが不生産的であると云ふに過ぎない。故に農業勞働にしても、又製造勞働にしても、若し其の勞働が欲求せらるゝ成果を齎らすに必要なる數量以上に雇傭せらるゝならば、矢張り其の過多の勞働は不生産的たるに變りはない。總ての生産は、假定せる消費若くは破壞を包含するものなるが故に、生産的勞働の觀念に取て必要なることは、即ち生産に依て創造せらるゝ價値は、生産に依て破壞せらるゝ價値よりも多くなければならぬと云ふこと。是れである。去ればこそシニオアーは、生産的及び不生産的消費者なる區別を設けたのである。（N. W. Senior, Political Economy, 1872, pp. 53-57.）此の區別は確かに利益がある。何となればミルの考へたるが如く、社會の總員は皆勞働者ではないが、何れも消費者なるを以てゞある。併し勞働者の場合にしても、又消費者の場合にしても嚴然確固たる境界線を設定することは不可能である。

然らば生産的勞働の最善なる定義は如何。イー・アール・ファラデー氏（E. R. Faraday）は曰く「生産的勞働とは、生産の場合に消費せらるゝ價値以上の價値を有し、又交換せられ得可き物質的若くは非物質的生産物を直接若くは間接に創造し或は增加せしむる所の勞働を云ふ」と。斯の如き生産物は、總ての必要品例へば日常の食物よりミルの「經濟學原理」に於ける鳳梨及び金モールに至る迄を包含するのである。又斯の如き生産物は、總ての永續性例へば一般の新聞紙よりプラトーンの「對話篇」に至る迄を包含するのである。尙ほヘルマンの「經濟學研究」中には各種の生産效力間に於ける分類が一層詳細に擧げられて居る。（F. B. W. Hermann, Staatswirthschaftliche Untersuchungen, 2 aufl. s. 70.）即ち或る勞働が生産者に取て生産的なるは、其の勞働に依て利潤が齎らさるゝ場合に限る。次に或る勞働が消費者に取て生産的なるは、其の勞働の價値が其の勞働を獲得する際に支出する價値を超過する場合に限る。最後に其の勞働が社會に取て生産的なるは、交換し得可き財の總額を增加する場合に限るのである。併し或る勞働は個人に取てこそ有利なるも、社會に取ては有利ならざる場合がある。例へば一般に運任せの勝負の如き類である。何となれば其の場合に於ける勞働は、一方が他方より收奪するに過ぎずして、富の一般的保藏を一も增加せしめざるが故である。他方に或る勞働は、生産者に取てこそ不利なる可きも、而も生産者が支出せる以上

に一般的富を增加せしむる場合がある。例へば各種の科學的實驗の場合の類である。茲に於てロッシャーは曰く「私人經濟は、勞働の生產力を測定するに其の生產物の交換價値を以てし、一般經濟は其の使用價値を以てするものにして、國民經濟は其の中間の位置を占むるものである」と。(W. Roscher, Grundlagen der National-ökonomie, buch I, Kap. 2, s. 150.) 併し如何なる見地より本題が考慮せらるゝを問はず、多くの最近經濟學者は、等しく非物質的生產物の創造をも生產的勞働の部類に數ふるものである。而して吾々が其の論據を高めれば高める程、夫れ丈け或る一定の勞働の生產效力を評價する場合に困難の程度が增加するのである。去れば吾々はロッシャーと共に「一國民が偉大であり、自由であり、又聰明であればある程、夫れ丈け個人の利得は其の國民及び世界の利得と一致する傾向が强くなるのである」と斷言し得るのである。(Roscher, Grundlagen der National-ökonomie, S. 151; Palgrave's Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III. pp. 218-219.)

右は、所謂生產的勞働說に對して現代經濟學者が與へたる批評の一である。次に私は、同樣に所謂生產的消費說に對する彼等の批評を聞かう。(次號完結)

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達(五、完)

津田誠一

二十

前叙の價値構成の諸條件にして一旦完備具發する時、吾人は什麼の理由に基きて此一物を他の一物よりも或は高く或は低く品騰するや。吾人が他物との比較に於て一物に賦與する重要の程度換言すれば評價の標準は那邊に之を求む可きや、最終效用說は爰に擡頭する。抑々一物の種屬全體に就きて觀たる效用と此物の各個の單位に關して考察したる效用との間に峻嚴なる區別を設け、舊來の效用說と稀少性說とを一體に融合して價値論上に一新紀元を劃し得たる此學說は、明かに其淵源を英墺兩國に發し Paul Leroy-Beaulieu を始め佛蘭西の學徒が之を紹述せるは、至極最近の事柄に屬する。乍併該學說の豫備前提と看做す可き若干の思想は必ずしも然らず。其第一は欲望飽滿の法則 loi de satiabilité des besoins 換言すれば、凡ゆる欲望は其强度に於て有限なりと云ふ見解である。一定量の麵麭は能く吾人の饑餓を癒す可く、一定量の水は以て吾人の渴渴を癒するに足らん。凡そ一定の時期に於る個々の欲望は其對象たる財貨を攝取する事多きに從つて次第に其强度を減退し、遂に飽滿の點に達して消滅するものである。其第二は欲望雜多の法則 loi de variété des besoins 換言すれば、欲望は其數無限なりと云ふ見解である。個人的例外は姑く措き正常の人間に就きて觀察する時は、苟くも現世に生を享得せる以上此生を可及的幸福に且つ恒久に持續する爲に變轉極まり無き欲望を或は創生し或は再現する事が人類自然の通有性たるは、古往今來常住不易の事實である。第三は欲望代位の法則 loi de substitution des besoins であつて、此は前揭二法則の當然の結果である。即ち一方に於て各個の欲望は其飽滿點に接近するに從ひ漸次其强度を減退するの事實あり、他方に於て人間の欲望は無限に變轉するの事實あり、爲に或は現在感受せらるゝ强度に從ひ或は之を充足するに必要な